2021 年6月 20 日 久宝教会 聖霊降臨節第 5 主日礼拝

メッセージ「本当の安心・安全とは」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 5 章 21−37 節

報道によりますと、大阪や東京に出されていた「緊急事態措置」は、今日までで解除されることになりました。明日以降は再び「まん延防止等重点措置」に移行するそうです。ワクチンの接種が少しずつ進んでいるとはいえ、世界を見ると、日本の何倍もワクチンの接種が行われ、厳格な都市封鎖、行動制限がなされていても、感染が再び増大している所もあります。決して楽観視は出来ない状況ですが、今回の緊急事態措置の解除も、1 か月後に迫った東京オリンピック開催に向けた、既に敷かれているレールなのではないかと疑ってしまいます。

もはや、大多数の人は開催を望んでおらず、医療関係者も開催すれば「感染が確実に拡大する」と警告し、さらには経済の専門家からも、「開催した方が、経済的損失が大きい」と言われているそうです。にも拘(かかわ)らずに、首相も都知事も「開催中止」を言い出しません。人々の命よりも大切なものがある……。それはもはや、お金ですらなく、ただ、ひとえに個人的な面子(めんつ)や立場、利権なのではないでしょうか。そのようなことを考えると、この先が非常に危ぶまれます。かつて日本が戦争に突入していった時も、きっと同じような状況だったのではないでしょうか。

「社会の平和、人々の安心と安全な暮らしを守るためには、この道しかない」という大義名分を振りかざし、周りの言葉には一切耳を貸さずに、一部のリーダーたちが突き進んでいく背景には、一体何があるのでしょうか。そこには本人にも自覚されていないかもしれませんが、心理学的にはきっと、過去に受けた大きな傷、トラウマがあるのだろうと思います。

自分自身の過去の傷を受け止めることが出来ない故に、その怨恨(えんこん)を晴らそうとして他人に対して暴力を振るってしまう……。そのようにして起こる暴力の連鎖ということが、人類の歴史の中では何度も繰り返されて来たのではないかと思います。どのようにすれば、そのような負の連鎖は断ち切ることが出来るのでしょうか。人によっては、自分が他人に対して威圧的に振る舞っているということに自覚がある場合もあるでしょうし、そうでない場合もありそうです。そもそも自分自身が過去に、傷を受けて来たという自覚すらない人も、少なくないのかもしれません。

今回の聖書の言葉も、先週に引き続き「マタイによる福音書」の「山上の説教」

からでしたが、イエス様の不思議な言葉でした。とくに 5 章 21 節から 48 節までは「〇〇してはならない」という禁止の命令が 6 つも続いています。しかも、そのいずれもが昔から言い伝えられている教えである「律法」では、「〇〇しなさい」と言われているが、「しかし、私は言っておく。〇〇してはならない」という形式で、過去の律法を越える新しい掟をイエス様は命じられました。それは、マタイの表現によると、過去の律法を「廃止するためではなく、完成するため」（5：17）だということでした。

しかし、その内容を見て見るとどうでしょうか。21 節からの最初の段落では、「人を殺すな」というだけではなく、「きょうだいに腹を立ててはならない」「馬鹿、愚か者と言ってもならない」とあります。さらに次の 27 節からの段落では、「姦淫（かんいん）するな」というだけではなく、心の中で「情欲を抱（いだ）いて女を見るな」とまで言われています。確かに、例えば他人の物を勝手に盗（と）ることはいけません。しかし、「あぁ、いいなぁ。欲しいなぁ」と心の中に思うことは、誰にでもあることではないか、とも思います。こんなにも厳しい掟を命じられて、一体誰が守れるというのでしょうか。イエス様はそんなにも厳しい掟を、あえて新たに命じられたのでしょうか。

しかし、古くからユダヤ教で最も重要視されていた 10 の戒（いまし）めである「十戒（じっかい）」を見ますと、その中にも既に、「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛とろばなど、隣人のものを一切欲してはならない」（出エジプト20：17）というように、心の中で欲すること自体を禁じている掟もありました。ですから、イエス様の言葉はそれを「隣人の妻」という共同体の中の特定の相手から、全ての女性一般に広げたことで、より厳しくしたものだったと理解することができます。

続けて、31 節 32 節には「『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』と言われているが、離縁自体してはならない」と言われています。このイエス様の言葉から分かるのは、伝統的に語り継がれて来た掟というものが、紀元 1 世紀の頃には既に、本来の目的から外れて運用されて来ていたということです。古代社会では、女性は家長である父親の所有物であり、結婚によって夫の所有物になりました。そんな女性が夫と死別や、離縁によって後ろ盾を無くし、一人で生きていくというのは、とても困難なことでした。律法に「離縁状を渡しなさい」と言われていたのは、離縁された女性が、その後もきちんと、結婚できる身分にあるということを証明するためだったわけです。ところが時代を経ていく中で、本来、女性の最低限の権利を守るものであった離縁状さえも、「離縁状を渡せば、離縁していいんだろう」というよう

に男の都合のよいように利用されてしまっていた、というわけです。

誓約について述べている 33 節以降も同様です。「偽りの誓いを立てるな。誓ったことは主に果たせ」と言い伝えられている律法を、イエス様は「一切誓ってはならない」と言っています。これも本来の律法の目的がないがしろにされて、運用されていた現状への批判だったのでしょう。ただ単に「掟やルールを形の上で守れば、他には何をしてもよい」のではなく、一つ一つの掟やルールが何を目指して、何のために定められているのか。何を大切にしているのか、その心を見つめ直して、守ることが大切だ、ということなのだと思います。

しかし、「言うは易く、行うは難し」です。そもそもイエス様はこれらの一連のお話、「山上の説教」を誰に向かって語っていたかというと、それは時の為政者、権力者たちではありませんでした。イエス様の前に集まっていた人々の多くは、様々な病気や障がいを持った人たちであり、宗教的にケガレている罪人と見なされた人たちであり、富と権力を持っていない、社会の中で小さくされ、貧しくされた人たちでした。確かに、そのような大勢の人たちの中に、「最近、うわさに聞くイエスとは、一体どんな男か」と思って、確かめに来ていた律法学者など指導者側、権力者側の人たちも紛れていたと考えられます。しかし、これらの一連の言葉はやはり、そのような一部の権力者たちだけではなく、群衆みんなに向けて語られたものだったのではないかと思われます。それは何故でしょうか。

とても悲しいことですが、自分が差別・抑圧され、弱く小さくされているからと言って、必ずしも隣りの人に対して、共感を持って接し、相手を大切にできるわけというではありません。ある特定の差別をされている人が、他所(よそ)では他の人を差別していることもあります。自分がやられた腹いせに、今度は自分が更に弱い人をいじめる、ということもあります……。中には自分が受けている差別とは闘いながらも、自覚のないまま他人を差別していることもあります。それこそ誰かの足を踏み付けているということに自覚のないまま、自分を抑圧してくる相手に抵抗しているようなものです。

イエス様がこれらの言葉を語られた群衆たちもまた、自分たち自身が小さく貧しくされながらも、きょうだいに向かって腹を立て、「馬鹿」と言い、心の中で他人の物を欲しがったり、羨(うらや)んだりしていたのでしょう。そして守ることの出来ないルール、律法も多くあった一方で、守ることの出来たルールについては、「ちゃんと守ってるぞ。これ以上、何か文句があるのか」と居直ることもあったのかもしれません。

私たちは、すぐに「ルールを守っているか／守っていないか」、「出来ているか／出来ていないか」ということにばかりに目が行きますが、そのような私たちに対して、イエス様は「そうではないよ」と言われました。「その律法が何のためにあるのか」を考えなければならない。他人を見下すような差別する思いがある限り、律法を守ったことにはならない……。この後に続く、イエス様の命令は、「自分に敵対する相手をも大切にしなさい」（5：44）であり、また「人を裁くな」（7：1）でした。

現代を生きている私たちは、皆が加害者であると同時に被害者であると言えると思います。大量生産・大量消費の 20 世紀を経て、今や地球環境そのものが悲鳴を上げています。人間社会の中でも、経済格差はますます拡がっています。そのような現実社会の中で、私たちは何に従って、何を基準にして生きて行けばよいのか。もちろん、法律などのルールがあります。しかし、それらはその時々に、権力の都合の良いように変更されたりもします。誰かが決めたルールを順守し、基準の範囲内であれば安心安全、なのでしょうか。

本当の安心安全は、一体どこにあるのか……。イエス様は言われました。「（あなたがたは）誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである」（5：36）。また「敵を愛し、あなたたちを迫害する者のために祈りなさい」。何故なら「天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」（5：44－45）……。私たちは自分の力で日々に生きているように考えがちですが、全ては命の神様からの頂きもの、預かり物です。神様によって恵みとして生かされること無しには、今日の命はありません。その原点に立ち返ることによってのみ、私たちはお互いを裁き合う生き方から、互いに大切にし合い、共に生きる生き方へと変えられて行くのではないでしょうか。

全ての人がそれぞれに傷を負っています。しかし、その傷に蓋をして、その傷を隠し、そこから目を背けて、他者と自分に暴力を振るう生き方から、解放されることも私たちには許されています。自分が受けた傷によって、その傷を隠すのではなく生かすことで、同じように傷ついた他人に寄り添い、その相手を癒す「傷ついた癒し人」にもなることが出来るはずです。イエス・キリスト自身がそのような生き方を、その身をもって示して下さいました。今日も神様から、命を与えられた私たちは、全ての命を生かし合う、本当の安心安全を目指した道へと、イエス様と共にあって導かれて行きます。